

スローカーブを、  
もう一球

山際淳司



# スローカーブを、もう一球

やまぎわじゆんじ  
山際淳司



角川文庫 5962

昭和六十年二月十日 初版発行  
平成八年三月二十五日 三十五版発行

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

編集部(〇三)三二三八—八四五—

電話 営業部(〇三)三二三八—八五二—

〒一〇二 振替〇〇二—三〇—九—一九五二〇八

印刷所——旭印刷 製本所——本間製本

装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

# スローカーブを、もう一球

山際淳司



角川文庫 5962



## 目次

八月のカクテル光線	五
江夏の21球	三五
たった一人のオリンピックク	六
背番号94	八七
ザ・シティ・ボクサー	一九
ジムナジウムのスーパーマン	二五
スローカーブを、もう一球	一八五
ポール・ヴォルター	三三



八月のカクテル光線

## 1

たったの「一球」が人生を変えてしまうことなんてありうるのだろうか。「一瞬」といいかえてもいい。

それは真夏の出来事だった。

夏でなければ起きなかつたかもしれない。夏は時々、何かを狂わせてみたりするのだから。

八月一六日。晴れ。気温は30度をこえるはずだとウェザー・キャスターはいつていた。

## 2

ふらふらっと、ボールが舞いあがった。

その打球に力はない。

甲子園球場にいた三万人あまりの観客は一人残らず、その打球のゆくえを追ったはずだった。白球はカクテル光線のなかを弱々しく上昇し、球場は溜息ためいきとも喚声ともつかないどよめきに包まれた。

打ちあげてしまったのは箕島みのしま高校の森川康弘である。甲子園のマウンドには星稜せいりょう高校の堅田外司昭がいる。

堅田投手が投げたのは、真ん中高目の直球だった。時刻は午後の七時半に近い。



箕島対星稜の試合は延長16回裏に入っていた。得点は3―2。4回到両チームともに1点ずつを入れ、試合はそのまま延長に入っていた。12回の表に星稜が1点を入れると、その裏、2アウトから箕島は同点に追いついた。ホームランによる1点だった。

16回の表に、星稜は1点を追加した。この試合、三度目のリードだった。

星稜の堅田は、その裏のマウンドに上ると簡単に2アウトをとった。セカンドゴロと、キャッチャー前のゴロ。簡単に2アウトをとりすぎた。だからといって気を抜いていたわけではなかった。

堅田投手が、最後になるかもしれないバッター森川に投げた一球は、やや高目に浮いていた。打ってくる、と思った瞬間、バットが動いた。振りの強さとはうらはらに、打球に力はない。

《これでおわりか……》

一塁側のベンチにいた箕島ナインは、一様にそう思った。

打球は、その一塁側ベンチに向かって舞いあがっている。星稜の一塁手、加藤直樹が、そのボールを追っていた。打球を見上げながら、小走りに追っている。

3

誰にだって失敗はある。

一九七九年の夏、一人の一塁手がエアポケットに落ちこんだ。数千万人がそのシーンを見つめていた。その「一瞬」は十分に彼を負のヒーローにしてしまった。

《……あの落球のことで、しこりが残っているわけじゃないんです。

その後、いろいろといわれましたよ。みんな冗談でいうんだ。あのエラーはお前の作戦通りや”なんてね。でも、悪意はないんです。陰でこそそそいわれるよりはずっといい。ぼく自身、星稜の野球部出身だということを初対面の人にいうとき、自分のほうから先にいうんです。甲子園の16回にカクテル光線のなかで落球した、あの加藤です、あの一塁手がぼくです、と。だから、しこりはないんです、ホントに。

でもね、やはりスツキリできない部分があつて、それはおそらくぼくの一生、ついてまわるんじゃないかと思うんです。

じっくりしませんよ、そりゃ。あれ、落球じゃないんです。ぼくのグラブにボールはまったく触れてないんです。グラブを出した時は、転んでいたんです。……そう思ってみたりすると自体、スツキリしてないからなんでしょうけど……しかし、見えてくるんですよ、あのシーンが。ファウルがあがつた。落下点までダッシュした。ふつうなら簡単に落下点に入つて落ちてくるボールを待っている。あの時は自分では落下点に行つたつもりが行つていなかつた。ボールが一瞬、照明灯を横切り、見えなくなつた。そのボールが見えた瞬間、一回転していた。自分では左足が人工芝にひっかかつたと思つていたんですが、あとでテレビを見たら、左足は人工芝をまたいでおり、右足がひっかかっているんです。

あの一球をぼくが捕つていれば――》

捕っていれば、その試合はちょっとした番狂わせという評価を残して終わったはずだった。優勝候補の箕島高校が惜敗し、選手たちは宿舍へ帰って涙を流し、シャワーで汗を流すと食事をして、明日のことを考えるはずだった。

そして、何ごともなかったように時は流れる。

しかし、真夏のシーンは次の「一球」をも作り出す。それは偶然だろうか、あるいは必然なのだろうか。

一塁手の加藤がその一球を捕りそこねたあと、打者の森川は堅田のボールをレフトスタンドに打ちこんだ。

《ほくは》と森川はいった。《一度もホームランなんて打ったことなかったんです。県大会の予選でも打ったことがなかった。とにかく、センターを中心に打ち返す。それしか知らないんです。それがホームランになっちゃったんですから》

森川は、打った瞬間に手の平に残った感触をいつまでも忘れられない。また同じようにホームランを打てるのではないかという思いにとりつかれてしまった。

ホームランの快感が、否定しても頭をもたげてくる。気がついた時には、大振りになっている。

《あれから一年たって、やっとそのクセがなおったくらいなんです》

その「一瞬」の感触を頼りに、彼は、その後の一年を生きたとのことだ。ホームランを打てなくても、それは充実していたに違いない。

二つの「一球」を投げたピッチャーがマウンド上にいることも忘れないでほしい。彼もまた欠かせないキャラクターだ。

投手の堅田外司昭の話——《アウトコースの低目めがけて速球を投げたつもりなんですよ。それが真ん中高目に行っちゃった。自分でも気がついていましたんです。あの回は、足が思うように上がらなくなっていた。自分じゃ疲れているっていう自覚はないんです。でも足が上がらない。それでコントロールが甘くなっていたんだと思う。一塁手のエラー？ 全然気にしてなかった。あのファウル・フライがとれなくても、1点リードして16回の裏、2アウト、バッターのカウントは1—0になっていたんですから……》

たしかにそうだった。一塁手の加藤自身、落球を気にしてはいなかった。森川の同点ホームランが出るまでは、である。

一瞬の出来事だった。人工芝に足をとられて転倒するのに、時間はいらぬ。延長16回の裏で、試合はふり出しに戻ってしまった。

5

ベンチにいて、尻しりが持ちあがらなかった人の話をしよう。

守備についていた星稜のベンチには控えの選手たちと監督がいた。監督とは、自らダイヤモンド

ンドの中に入っていられず、やきもきするしかできない立場の人間のことである。参加しているようで、していない。心配することに全力を傾けているオブザーバーだ。

《あの一塁のファウル・フライ、ぼくは打球があがった瞬間から捕れないなと思っていたんです》

星稜の山下智茂監督は三塁側のベンチ、最前列でその打球を見上げていた。

《ぼくはそれぞれの選手の体調とか疲れ具合を知っているわけです。もちろん、加藤の健康状態も見ている。ファウルを追った加藤のダッシュを見て、あの勢いでは落下点に入るのは無理だと判断していた。ぼくは、捕れると思った時は、自然にベンチからお尻があがって捕ったあと選手がうれしそうな顔をするのを見るクセがあるんですが、あのときはお尻があがらなかった。》

ぼくは加藤に限らず、選手の疲労を考えると、責めたりなんかできないと思っています。14回あたりから、明らかにみんなの顔色がかわってきている。勝ち負けより、お互いの選手がグラウンドで倒れなければいいと思っていました。しかも、ぼくの場合、ふだん自分がしごいているから、子供たちの健康状態がよくわかってる。延長も16回になると、肉体的にはもちろん、精神的にもまいっていますからね》

監督という人種について考えることがある。彼らは楽しいのだろうか、と。彼の立場から見

ると、グラウンドに見える光景は彼自身が失ってしまった過去を追憶させる。

たいていの監督は、すでにして若くはない。はじけるような肉体は失われている。それでも彼は野球にコミットしていかうとするのだ。誰よりも自分がひたむきであることを示しながら、哀しい情熱だつて、この世界にはある。

《甲子園に来るまで、しごいてますね。七八年の県大会で、甲子園にあと一步というところで金沢高校に大差で負けたんです。それからというもの、夏の強い陽差しのなか、それこそぶっ倒れるまで練習させた。エラーをすれば、こぶしやバットで殴ったこともある。冬は冬で、外で練習できませんから、室内でウエイト・トレーニングの毎日。バーベルの上げ下げや、ダッシュ、ハードル……。この冬の練習でやめていくのがほとんどですね。放課後の練習にしても、毎日午後三時半ごろから七時半、八時まで休む暇なくやらせる。選手も本当にひどい練習だと思っているでしょうね。そして、二日交代で選手を自宅に泊めていました。七九年の春、自分の実家から借金をして家を建て、生徒たちを順番に泊まりこませたんです。学校でいくら厳しくしつけても、家に帰って甘やかされたんでは、また元に戻ってしまう。ぼくとの裸のふれあいのなかから何かを学びとってほしかった。

生徒たちに正直な感想を聞けば、「かえって疲れるからイヤ」というでしょうけどね。

そんな風にしごいてきて、甲子園にやってきた。箕島との延長戦では、練習の苦勞を思い出して耐え抜け！ といいました。選手たちも疲れてますから、強く怒ったのでは萎縮してしまつて、のびのびとしたプレーができない。それで、負けたら、おれが責任をとるから、練習で

やったとおりにやれ”とだけいい続けたんですね。

負けても勝ってもよかった。選手にはいいませんでした。が、箕島を相手にして勝てると思  
っていませんでしたから……」

星稜の山下監督はそんな風にいつている。

箕島は、誰の目から見ても優勝候補の筆頭にあがっていた。その四か月ほど前の七九年春の  
選抜高校野球では、この箕島が優勝している。そのさらに前年、一九七八年の選抜、夏の甲子  
園にも出場しており、七九年の夏で四回連続出場を果たしていた。しかも、その四回ともエー  
ス石井が投げている。箕島の石井投手は甲子園のベテランだった。

7

「ゲーム」——なんと面白い言葉だろう。

人は誰でも、自分の人生の中から最低一つの小説をつむぎ出すことができるように、どんな  
ゲームにも語りつがれてやまないシーンがある。それは人生がゲームのようなものだからだろ  
うか、それともゲームが人生の縮図だからだろうか。

ゲームが始まる。

星稜と箕島のゲームは以下のように始まった。

甲子園のグラウンドは、砂の乾きが早い。水は撒まいたそばから吸収され、あるいは蒸発していく。風が吹くと、かすかに水分を含んだ空気がスタンドに運ばれ、それはスタンドのファンには甲子園の土の香りとして知覚されるはずだ。球場の入口あたりにはイカを焼くにおいが充満している。それは涼しい香りではない。ねっとり、まわりつくような香りとして、在る。涼しさはむしろ、香りの少ないカチ割り氷にある。汗は流れるそばから蒸発し、塩気だけが残る。そしてさらに汗が流れ、夕暮れとともにじっとり皮膚にしがみつ়。

両チームともこの日の練習を開始したのは午前一時すぎのことだった。星稜高校は住友金属総合グラウンド、箕島高校は厚生年金グラウンドで軽いウォーミング・アップを行った。

箕島のエース、石井毅投手は肩ならし程度にキャッチボールをすると、それだけで練習を切りあげた。

《苦戦するんじゃないかっていう予感なんてなかったよ。自分のピッチングをすれば勝てると思っていた。いつもそうだった。負けるときははたいてい自分のピッチングができないときさ。落ち着いて投げれば勝てる。それだけだね。》

甲子園のマウンドに登って、アガっちゃうなんてことは考えられなかった。もう、これが四度目の大会でしょ。初めて甲子園のマウンドに登ったのは高校二年の春の大会だったけど、そのときもどうってことなかったんだ。初めての入場式るとき、ちょっとドキドキしたけどね。



試合が始まる前にブルペンで二、三球投げたら、それだけで気分が落ち着いていた。星稜戦も同じこと。試合前のミーティングで、星稜の選手のスコアカードを見せられて、星稜と宇治高校との試合の打撃成績なんか書いてあったけれど、それ以上細かいアドバイスもなかった。バッテリーの間でも、これといった話はしなかったね。とにかく、自分のピッチングをすればいいんだからさ。それだけだよ》

箕島のナインは、ひょっとしてこのゲームが延長戦にでももつれこむか、あるいは試合の進行が長びいてナイターになるのを楽しみにしていた。この日の第四試合は午後の四時試合開始と予定されている。第三試合までの進行が遅れるか、あるいは別の理由で第四試合がナイターになることは十分に考えられる。箕島のナインにとって、甲子園のナイターだけが初体験だった。

箕島の四番打者、北野敏史の話——《三回戦の抽選のとき、キャプテンに相手はどこでもいいから、とにかく第四試合を引いてこいって、みんなदैいっていたんですよ。ナイターができるかもしれないからね。ぼくらが甲子園に入ったのは午後の二時半ごろかな。控え室っていうか、ベンチ裏の廊下のところに先に星稜のメンバーが揃っていた。廊下をはさんで、向かい合って坐るんですけど、ぼくらはきょうの試合がナイターになるかどうかで賭けてたりしたんじゃないかな。口でいうだけですけどね。第三試合までの進行は、そんなに遅れていなかった。だいたい予定どおりの時刻に始まりそうだった。四時から始まったら何時には終わるとか、日没は何時ごろだとか、そんなことをいいあっていた》